

学術俯瞰講義 死すべき者としての人間一生と死の思想

第4回 2009年5月11日

# 死を越える希望の 思想史

清水哲郎 SHIMIZU Tetsuro  
東京大学大学院人文社会系研究科  
次世代人文学開発センター

# 今回の授業で考えること

- 古来、人は、「私たちは皆、いずれは死ぬ。」という事実の前に佇み、どう対処しようかと考えてきた。
  - 死という事実を前にして、私たちはなお希望を持ち続けることができるだろうか。
  - この問いに答えようとした様々な試みの中から、キリスト教の思想伝統を取り上げてみる。
- Contents
  - 死ぬとはどういうことか 身体と人の死の区別と別世界移住の思想
  - 復活の思想とその背景にある死の理解
  - 死後への希望を消す方向性

# 1. 《死ぬ》とはどういうことか

# 人生が終わること

- みなさんは、どういうことばを使いますか？
  - 「死ぬ」
  - 「居なくなる」「なくなる」
  - 「逝く」「別れる」
  - 「あっちゃさいぐ」
  - 「お迎えがくる」
  - 「永久の眠りにつく」

# 「死ぬ」の二つの面

- 「これはもう死んでいます」:何かを指して「死」という状態にあると言っている。
- 「父はもう死にました(もう居ません)」  
目の前のものを指して言えない=  
この世にはいない=  
どこかに逝った？

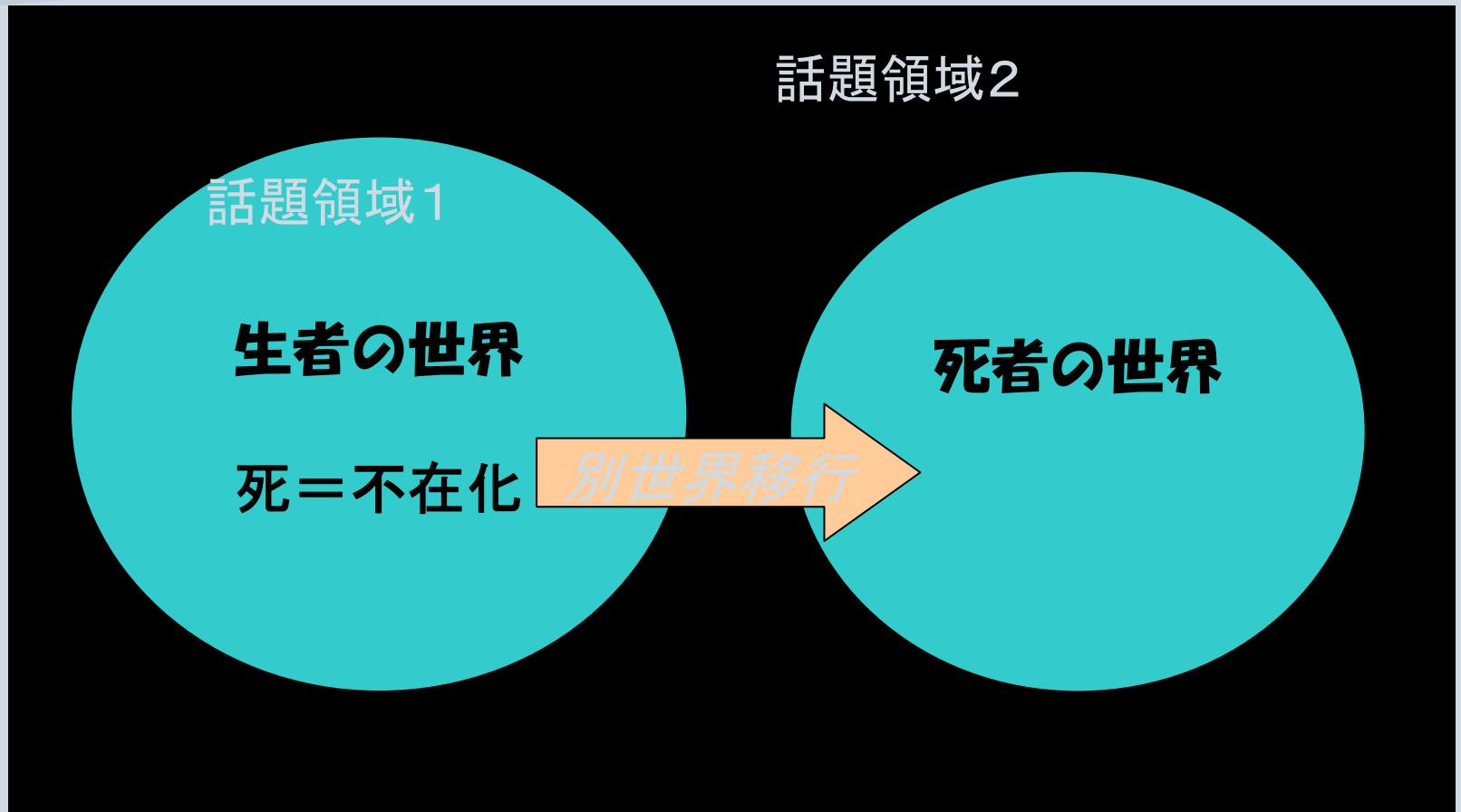
# 身体の死

- 「これは死んでいる」: 身体を指して言っている
- 身体が死ぬということ
  - 動いていたものが動かなくなる
  - 再び動く可能性はない(=不可逆的)
  - 変質しはじめる
- 生物一般について言えること。
- 葬る対象

# 人(格)の死

- 「Xはもう死にました」 語られる主体=人(格)
- 人(格)の死
  - 人格的交流ができなくなる 「別れ」
  - もう交流は再開しない(=不可逆的) 「永久の(別れ)」
- ここ(この世)には居ない (現世内)不在の主張
  - どこか(あの世)に行ったのか? 別世界移住
  - 「逝く・行く」こととして語られる →死者の世界の想定

# 現世界と冥界





## 参考：人格の死についての別の考え方の例（続）

- 「父は10年間死んでいます」（＝10年前に死にました）
  - この世とあの世を包括する全体が話題領域になっている
  - 「死んでいる」は「この世とは別の場所に存在している」こと
- 別世界移行型 語り方は「不在の主張」ではない

# イザナミとイザナギの別れ

- イザナミの死
- イザナギはイザナミを連れ戻しにヨミ(黄泉)の国に訪ねる > イザナミ登場 会話の記述があるだけ
  - 人格的交流の再開 cf 口寄せetc.
- イザナミは「相談してくる間、覗くな」と言う
- イザナギは覗いてしまう
  - 身体が無残な変貌

\* 身体と人格の重なりと分離

**生物学的生命**  
**biological**  
**life**

と

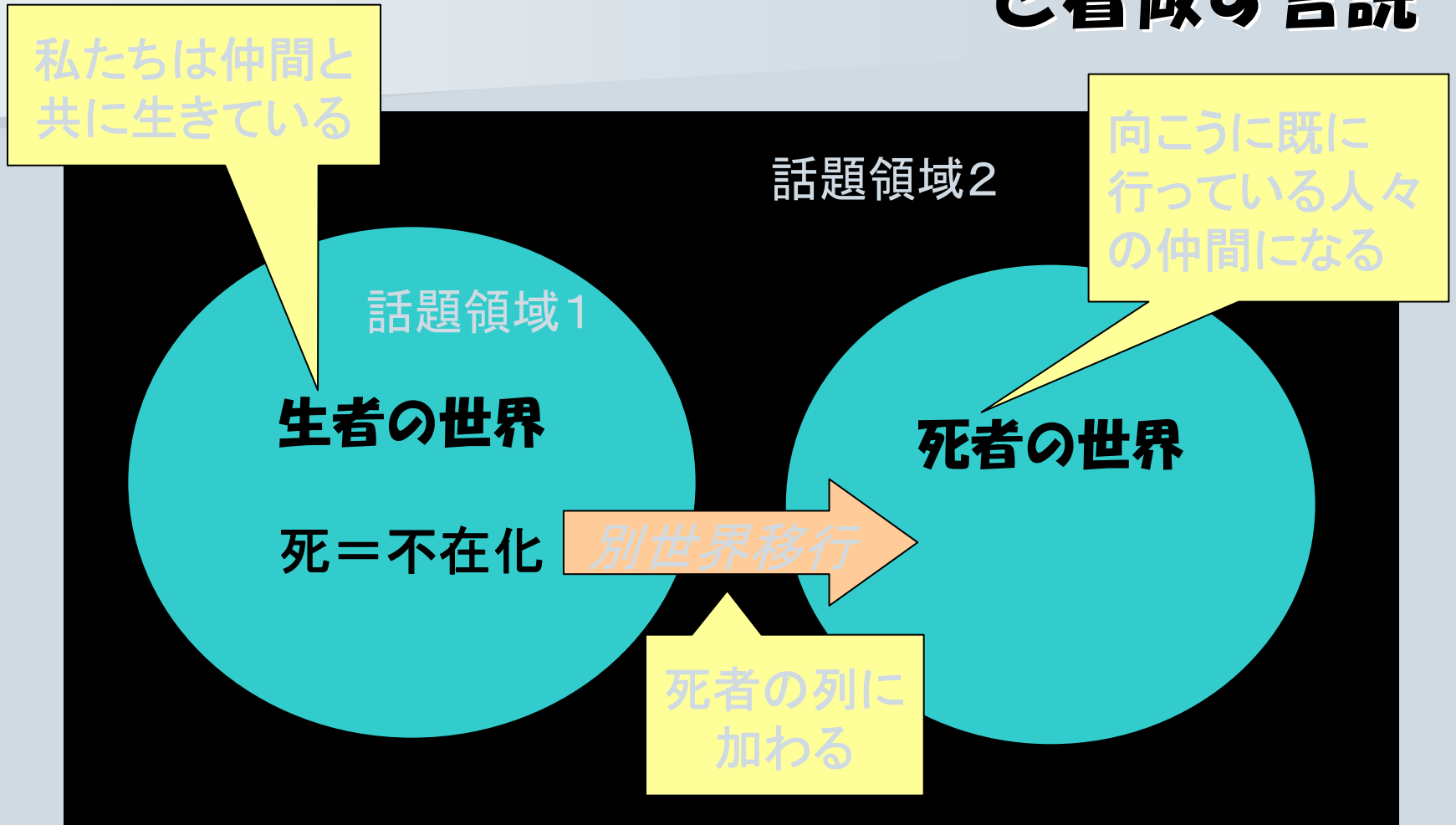
**物語られる生命**  
**biographical**  
**life**

- 身体に注目する視点：
    - 生物学的個体
    - 医学が注目する対象
    - 人(格)の生にとって土台となる
  - 人(格)に注目する視点：
    - 自分の人生の物語りを作りつつ生きている 主体としての個体
    - 仲間の物語りとのつながり
    - 誕生から死までの物語り
- cf. 死すべき人

# 死者の世界？

- 私たちの文化は、あたかもどこかに死者の世界があって、死ぬことはそこに行くことであるような語り方をし、死者を送る振る舞いをする
- でも、死者の世界について、必ずしも確信しているわけではない
- それでかまわないと思っているらしい。

# 「死んでもひとりぼっちではない」 と看做す言説



死後の世界をリアルなものとして前提する必要はない。  
このような語り方によって、構成されるもの

# 死者の列に加わる

- 私たちは共に支えあって、生きている
  - 死ぬことは決して、仲間の輪から独り離れて、孤独になることではない
  - すでに死んでいった人たちの仲間になる
  - 送るものも、やがて死者の列に加わることになっている
- \* こういう考えが私たちの語り方や振る舞いを支えている—  
語り方や振る舞いがこういう考えを支える
- \* 「死者の列に加わる」は、死後の世界を想定しなくても成り立つ言説でもある。
- \* 物語られる生の視点に属する
  - 誕生から死まで、人々のネットワークの中でダイナミックに生きる物語り
- 以上は、スピリチュアル・ケアのための基本的状況認識の一つ

## **2. 《復活》の思想と死の理解**

# イエス＝キリストの死と復活

- 「イエスこそメシア(キリスト)である」と信じる人々のグループ
- イエスの処刑(十字架)後も、メシアとしてイエスに期待 → イエスは復活したと主張
- パウロ(新約聖書中最古の理解)による復活理解: イエスの復活の事実 — 信徒たちの復活の希望／プシュケー的身体 → Pneumatic身体 (Iコリント15)
- 使徒行伝に伝わるパウロの証言: 大いなる光をみ、イエスの声を聞き、視力を失う (9:3-8、22:6-11、26:12-18)
- 福音書が書かれた時期になると: 身体をもって復活。空になった墓、普通の生きている人のように現れる。 釘で打ち付けられ、槍でつかれた痕をもつ身体(ヨハネ20:24-29)
- イエスの神格化(人間メシア→神に近い特別な存在→神の子である神／信仰の対象)と連動?
- イエスの復活 — 最後の日における、死者たちの復活、信徒たちの復活



# パウロによる死の起源理解

- 「一人の人(アダム)によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだ……一人の正しい行為によって、すべての人が義とされて命を得ることになった」(ロマ5:12、18)
  - ただし、創世記3章において、アダムは神の命令に背く前は不死であったとはされていない:
    - 「…お前は顔に汗を流してパンを得る。土に返るときまで。お前がそこから取られた土に。塵に過ぎないお前は塵に返る」(創成3:19)
    - 「人は我々の一人のように善悪を知る者となった。今は、手を伸ばして命の木からも取って食べ、永遠に生きる者となるおそれがある」(創世3:22)

# パウロと復活への期待

- 「このように私たちは**信によって義とされた**のだから、私たちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、…今の恵みに**信によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望**を誇りにしています。…**永遠の命に導く**」(ロマ5:1-2,21)
- イエスの復活は、終りの日における死者たちの復活の先駆け。復活がなければ、望みもない：  
現在：プシュケー的身体／復活：プニューマ的身体(不朽)  
(Ⅰコリント15)：死者たちは、朽ちぬ体に復活し、生きている私たちの身体は変えられる。
- この世に生きている／しかし、この世に対して死んでいるかのごとく、未来の復活後の生を先取りして生きる  
「あなたがたも、自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい」  
(ロマ6:11)
- Cf. 「体をはなれて、主のもとに住むことをむしろ望んでいます」(Ⅱコリント5:8)

# 復活思想の背景にある 人（格）の死の理解

- 人格的交流ができなくなる
- 身体と共に人格もあり続けている
- しかし、もうその活動を停止してしまっていて、再開は望めない 現世内不活性化
  - 「眠る」こととして語られる
- このような考え方をする文化においては「復活」ということが問題になる
  - 新約聖書の「ネクロス」は死者 & 死体

# 別世界移住型と 現世内不活性化型の並存

- 復活：現世内不活性化
- 金持ちとラザロ（ルカ16:19-）：死んで宴席に行ったラザロと、陰府で炎の中で苦しむ金持ちというお話し
- キリスト教の教説は、この二つの線を整合的なストーリーにしようという努力

### **3. 死後への希望を消す方向性**

# 神の定め of 絶対性とその理解

「私は裸で母の胎を出た／裸でそこに帰ろう／主は与え、主は奪う／主の御名はほめたたえられよ」ヨブ記1:21

「人生はあなたが定められたとおり、月日の数もあなた次第／あなたの決定されたことを人は侵せない／・・・

木には希望がある、というように／木は切られても、また新芽を吹き、若枝の絶えることはない・・・

だが、人間は死んで横たわる／息絶えれば、人はどこに行ってしまうのか・・・

倒れ伏した人間は／再び立ち上がることなく／天の続くかぎり、その眠りから覚めることがない。」ヨブ記14:5-12

- ・人間の知をはるかに超越した神の配慮
- ・ここからすると、復活に望みをかけるというのは？

# 若きルターーの思想

- 「人が救われるのは、行いによるのではなく、ただ信による」ということの尖鋭な意味
- 奴隷意志論 「善をしようと思うのだが、つい悪をしてしまう」という意味ではない。「もっとも善なることをしている」と思っているが、それが悪である、「自らの善(幸福)を追求すること自体が悪である」という意味である。永遠の命を欲しがること自体が悪。では「どうしたらよいか？」—そう問う姿勢が問題
- 神の絶対性を核にする姿勢からは、自分が永く生きたいというような望みは切り捨てられる。
- 《信》は、自己が己の善を求めるという態度から離れられない事態に絶望し、己が碎かれるという仕方で空しくされたところに、故知らず成立する、神へと向かう態度

# Cf. イスラム思想にも

- 現在のイスラム原理主義のテロリストの考え
- ラービア(スーフイズムー神秘主義ーの中に位置する女性)  
“おお神よ、もし私が地獄への怖れからあなたに祈ることがあれば、私を地獄の火で焼いてください。楽園への期待からあなたに祈ることがあったら、楽園から追い払ってください。けれどももし、私があなただけをあなた自身のために祈るのであれば、あなたの不滅の美を与えてくださいますように”